彩りのカルマ

頼守さん

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

二階堂　慶光（よしみつ）の娘は三人居た。

輝くような笑みを持つ、誰にでも好かれる可憐な末子の紅。

人一倍元気の良い、姉御肌で器量の良い長女の桃香。

そして、最後に、性別がどちらとも取れそうで影の薄いながら、存在感だけはある、桃香と双子である次女の舞彩。

上雲神社が有名な半島の街、江世羅（えぜら）の街に、何度目とは知らぬ夏がやって来る。

そして、今日も三人娘の父親は、誰を巫女に送るか頭を悩ませていた。

「何なら、僕が行くよ」

「いやいや、待て待て待て。お前さん、これはそんなホイホイと決められる簡単なことじゃあ無くてだな」

「狐ヶ崎さんに嫁入りでしょ？男色だって聞いてるから、あちらさん側に性別を変えて貰えば良いじゃない」

主に、この娘の言う通りではあるものの、実状を正せば、実際のところ、専らの悩みの種は、無自覚に局所的な地雷ばかりを発生させる娘である。

目　次

汽車と双子 ―――― 1
黒真はマグロと読むのが正しい ―――― 4

汽車と双子

人は誰しも、何かを抱えているものである。
それは、友への思いであったり、家族への不満に見えるようで幸せの延長線上にある何らかであったり、顔だけ知っている他人へのお節介な感情であったり……と、本当に、全てがすべて同じようで違う、似ている何かを背負って生きている。
その重みを嬉しいと感じるものもいるだろうし、また、悲運だと嘆く人もいる。

僕は、そのどちらにもなれる可能性を宿した若者の一人なのであろうことを、知っている。
そんな僕を捻くれ屋だという姉が、誰よりも一番に僕のことを心配してくれているのを、何となくわかっている。
そんな僕と姉のことを複雑な感情を浮かべた顔をしている幼馴染みの淡い恋情があることも、そこはかとなく感じてはいる。
それを、どこか面白くなさそうな顔で見つめている、開けた車窓の枠に頬杖をついた双子の妹の紅（くれない）が対面に座っているのは、目を伏せている僕がわざわざ顔を上げて見ずとも予測できる。
「つまんないねぇ」
「……そう」
朝はいつになく蒼白い顔から更に血の気を引かせていた紅が、二人きりの汽車の中の一つの個室席に溜め息を落とした。
同意するでもなく、否定するでもなく。
けれども、確かに、同じことを瞼の裏の暗闇の中で思ってはいたので、頷いてあげることにした。

不意に、目を開けた先で、開いてあった車窓から吹き付けてきた風に巻き上がったお下げ髪を揺らして、妹が此方をにやついた顔で見ているのを見た。
身内の贔屓目を引いてみても、妹の彼女、紅は可愛らしいようで、この個室の確保にも僕の悪友が駆り出されていた。
きっと、帰ったら帰ったで、姉と妹と幼馴染みとの愉快な三角関係が勃発するのだろうことは想像に難くない。
去年の近所の盆踊り大会での、一幕のようなことが起こるのなら、僕を側に置きたがる彼らに付き合ってあげないこともないかと、身も蓋もないことを考えながら目を瞑っていた隙に、暑さに火照った頬を伝う僕の汗を拭ってくれた紅にお礼を言った。
「良いってことよ。それより、そろそろ着きそうだよ。ほら」
彼女が頬杖をついていた窓の向こう側に向けられた指の先を辿ると、成る程、懐かしく、また久しぶりな気のする風景が広がっていた。
明るくお日様の臭いのする近所の工房のお姉さんが、ごちゃごちゃとした街並みの中で、洗濯を取り込んでいるのを遠目に見掛けて、目を和ませた。
あの人からは、今も絵の具を全身に浴びせたような油絵の具の鼻にツンと来る臭いがするのだろうか。
「舞彩（まい）って、ほんと、この街が好きだよね」
何故か、拗ねたような口調に反して、目を向けた先で先ほどと同じくにやけた意地の悪そうな笑みを浮かべた紅の言葉に、目を瞬かせる。

好き、ねえ？ふむ。好きかと訊ねられれば、
「いや？」
としか、答えようがない。
捻りも何にも考えていないまっさらな答えだというのに、この妹とくれば、胡乱気な目線を向けてくる。

一応、数時間の差の僅差ではあるものの、年上の威厳というものが形無しだった。
仕方なく、まあでも、と、その後に付け足してみる。
偶になら、素直になるのも一考の余地ありというのも最近は覚えたのだから。
滑らかな紅の髪の毛に手をすべらせるのを楽しみながら、その一方で、その手を止めて目を伏せて、窓の向こうに視線をやった。
「けど、街の皆は好きだよ」
釣られて、妹が視線をそちらに向けたのを見やったことに、僕は微笑む。
ビー玉のような目をキョトン、とさせた妹が、一拍遅れて、もう、素直じゃないんだから、と唇を尖らせた。
まるで、林檎ジュースだと思って飲んだものがオレンジジュースだったみたいな顔が笑えて、よしよし、と頭を撫でてやる。
からかいに混ぜろとでも言うように、紅の艶やかな黒髪の尻尾のようなお下げ髪の先っぽを風がはためかせるようにして遊んでいった。

――……夏が、始まる。

黒真はマグロと読むのが正しい

「はい、到着〜!!」
自前のリュックを背負った妹は、僕にキャリーバックの一つを持たせて、駅から出て散歩歩いた先でそう言うと同時に駆け出した。
あ、そんなにはしゃぐと転ん……ドベシャッ、と非情な音が、改札機を出た直後の僕の耳に届く。
「だから言ったのに……」
「何も言ってないヤツが言うな!!」
そうだった。そう言えば、口にはしていなかった。
ごめんごめん、と謝りながらも汚れないようにキャリーバックを担いで駆け寄ると、立ち上がろうとしていた妹の紅に片手を差し出した。
「舞彩の馬鹿……うっ、めっちゃ恥ずかしいよぉ……うぅ……」
顔を俯かせて泣き言を言う紅の手を引いてやることにして、何とか実家に辿り着く。
その道中に、紅の有り様に事を察した近隣住人の優しい心遣いで彼女の肘と膝と手のひらについていた泥を拭われたり、慰めにお菓子を貰えたり、ついでにお土産物を後で配りに行きますと伝えたりで途中途中足を止めながらだったが、早く着けて良かった。
彼らが優しさの塊のようであるのは分かっているけれど、この状態で人目に晒されて、羞恥に泣きそうになっている妹をこれ以上放っとく訳にも行かないからである。

「ほら、家に着いたから。もう大丈夫だよ」
「……お風呂、先に行きたい」
妹の荷物を地面につけて万が一にも汚さないようにどうにか抱えて、しゃがみこんだ僕は、紅の顔を下から覗き込んだ。

蒼白い顔はいつもと変わらず。しかし、僅かに朱の差した頬には、嫌な予感を覚える。
風邪を引いているのなら、立っているのも辛い筈なのだが成長したのか我慢強くなっただけなのか。やれやれ。
もし、これが、泣き上戸の父に知られたら、「感動した!!」だとか言ってこっぱずかしい名目で街中を巻き込んだ宴会を開きかねないのが、現実と言うものである。
ごめん、そうなったら、適当なところに一緒に避難させてやるぐらいしか出来ないよ。

僕としては、泣くのを堪えてここまで歩いた上に、家族に会うなら、それも、数カ月振りと来ればこんなよれよれの姿を見せたくないと思う彼女の願いを叶えてやりたいのは山々だが、流石に、誰にも会わないで風呂場にまで直行するというのは難しい。
手引きというか、協力してくれそうな人を即座に思い付いた僕の笑顔に、目も合わせてくれなかった紅は、首を傾げていた。
言い出した紅からしても、難しいと分かっている案に、僕が何を思い付いたのかと不思議に思ったのだろう。
何、簡単なことである。一番に駆け付けて騒ぎ出しそうな父の頭の上がらないトメさんという最強兵器を持ち出して、内部に事情を組ませて、ちゃっかりと使用人たちにも通達してお節介を焼いてくれるだろう。

今更だが、僕らの実家の二階堂家はそれなりの良家の歴史があるので、そういう事情からしても、人目の多い実家の目から隠れて実家の風呂に入るのは至難の業だということだった。
「トメさんにだけでも、会ってからで良い?」
「ん」
案の定、頭に浮かんだのであろう老年配の女性の顔が曇るのを嫌がってか、眉を下げた紅は目を合わないままでも、静かに頷いてくれた。

さて、では、誰よりも心強い協力者に会いに行きますか。

「あら、お嬢様方のお帰りではありませんか」

しゃがみこんでいた僕と、紅の死角から現れたのは、丁度、話題に上がっていたトメさんこと、登米（トメ）　梅子だった。
年を感じさせることのないピンとした背筋に、張りつやのある肌といつだろうと崩れた所を見たことがない柔和な笑みの和装の女性。
流石というか、何というか。視界に映っていた紅の顔も、心なしかホッとしたような表情をしていた。

だが、しかし。
俯いたままだったからこその紅とは違って、静かに立ち上がった僕が徐に、彼女を背中に隠すようにしたのには訳がある。
僕にも、況してや、乙女のお年頃な紅にとっては殊更に残念なことに、やって来たのはトメさんだけではなかった。
顔を出そうとした紅の頭を後ろ手に押さえた僕は、風情ある風鈴の音が聞こえてきたのを遠くに聞きながら、今は会いたくなかった、久々なのに、見馴れた感覚のある人懐っこい笑顔の少年をその目に捉えていた。

「ん？帰ってきたって……よっ、舞彩じゃん」
幼馴染みよりも腐れ縁というのが間口　黒真こと、マグロ君だった。
実際には、クロマと読むらしいけれど、僕が発端でありながらも姉が流行らせた以降は、このお茶目な呼び名が定着化してしまった可哀想な十四歳の少年である。